

4. 問題の所在と視点

環境にかかわる倫理について、いくつかの視点から考える。環境倫理を専門に勉強しているわけではないので、全体を網羅して議論することはできない。私自信が感じたところにしたがって、次の四つの話題について取り上げる。

- (1) 扱うべき問題群（倫理的観点から）
- (2) 倫理について
- (3) 希望について
- (4) 科学者として

1. 扱うべき問題群 — 倫理的視点から —

① 資源配分の公平性

資源とは

エネルギー資源、観光資源、生物資源、人的資源・・・・

枯渇資源と再生可能資源

物的資源と文化的資源

ローカルな資源とグローバルな資源

現在の資源の配分は不公平だと思うか

なぜ不公平な配分を是正できないのか

○資源の有限性と配分のアンバランス（公平な配分とはどのようなものか）

地域間 南北問題 温暖化問題と経済発展、GE ジレンマ

電気を使っていない人々 約 14 億人（国連開発計画のレポート）

階層間 支配者と被支配者、労使間、男女間

世代間 将来世代の利益をどこまで考慮するか

○優先権 先進国が先に工業化したことによって富みを占有する権利を得ているのか
力による現状の配分の維持

○既得権益 すでに持っているものを失うことへの抵抗感

○間接化 搾取している者と搾取されている者の分離（企業などの組織による媒介）
加害者と被害者の乖離

個人の責任のあいまいさ。組織の倫理が確立していないこと。

○ヨハネスブルグ・サミット

政府＋NGO＋企業 企業が新たに加わって討議した

サミットの 3 大目標

「持続可能な生産・消費様式」、「貧困の撲滅」、「天然資源の保護と管理

○グローバリゼーション WTO に対する批判、考えられているのは誰の利益か

○先進国による発展途上国の援助 不十分なのはなぜか

博愛主義と仲間優先

② 所有の問題

○資源は誰のものか

知的所有権、生物の特許化 GATT, WTO, TRIPS

先進国の戦略として重要 製品の生産は安い労働力の発展途上国へと移る

GATT General Agreement on Tariffs and Trade 関税と貿易に関する一般協定

TRIPS the Trade Related Intellectual Property Rights Agreement 知的所有権の貿易関連の側面に関する協定 1995年に発効 特に生物に対する知的所有権や特許の保護の国際的な統一化のために GATT の一部として多国籍企業によって導入された最も新しい協定

WTO World Trade Organization 世界貿易機関 GATT を発展させる形で1995年に設立。知的所有権に関する法律の枠組みとして機能している

○私的所有の根拠は何か

生命倫理に関する自己決定の問題をめぐって。自分の体は自分のものか。

月の土地は誰のものか

In 1980, a Californian by the name of Dennis Hope hopelessly claimed the Moon to be his. He staked a claim at his local federal office and notified the US, the USSR and the UN. Since then a number of grown-ups have bought plots of lunar land from this lunatic at \$15.99 an acre.

○使用権＝所有権に対して、生存権＝所有権が優先される必要性

○資本主義社会の問題点

○バイオパイラシー バンダナ・シバによる批判 グローバル化による生命と文化の略奪
1980年 Ananda Chakrabarty に対して彼が遺伝子工学的に作製した油分解するバクテリアのpatentを US Supreme Court が認める判決をして、パラダイムシフトが起こる。その後生物、遺伝子などのpatent化が急速に進む。

企業（アグリビジネス）は、patent化された殺虫剤に耐性の植物と殺虫剤とをセットで売り、毎年種を買うように強制する。このため伝統的農業の破壊していく。

伝統的に利用されてきた植物（共有物）がpatent化されることによって、使用できなくなる。また、農業において、品種のバラエティが失われて、多様性の危機が起こる。

GATT や TRIP は、発展途上国の利益が反映されていない。西洋多国籍企業による不当な要求

TRIP の枠組みは、知的所有権委員会（IPC、アメリカの企業連合）、経団連、産業雇用者連組合（UNICE ヨーロッパの利益の代弁）

IPC ブリストル・マイヤーズ、デュポン、ジェネラル・エレクトリック、ジェネラル・モーターズ、ヒューレット・パカード、IBM、ジョンソン&ジョンソン、メルク、ファイザー、ロックウェル、ワーナーの12社

③平和の問題

○戦争による環境破壊

湾岸戦争—石油流出 核兵器による放射能汚染

○資源が枯渇したときに何が起こるか

力による不公平配分の維持

内戦と資源

○暴力に抗して

力への抑止力は何か 人間の生物学的弱さの問題（ローレンツ）
非暴力主義
健全な循環社会 持続可能な農業

④間接化の問題

科学の発達にともなう間接化の進行 面的な人間関係から線的な人間関係へ
環境問題でも、問題が間接化し、責任の所在があいまいになっていく。
忘却に抗して、問題を絶えず再認識することが必要 → 教育の重要性

2. 倫理について

① 「科学倫理」、「環境倫理」とは？

○技術倫理ではなく、科学倫理であること

技術倫理は昔から議論があるが、「科学」については価値中立であると考えられてきた
科学の応用に関する個別的問題ではなく科学自体が内包している倫理的問題があるのか

○環境倫理は、人の自然に対する倫理

人との関係を規定するのが倫理が、人と自然の関係を扱うことが可能か

○実践との関係は？ 倫理は理論と実践とを結合するもの

企業に就職すれば、どろどろした問題に対面しなくてはいけなくなる可能性がある
大量殺戮用により効率のよいノズルを作ることは、単なる技術的な問題か
倫理は実践が重要なので、アカデミズム（大学での講義）にはそぐわないのではないか
知性だけでなく、感情が必要な分野ではないか
教育において「感情」の要素が排除されてきたことは、問題ではないか
三田の自然の中を散歩の方がよほどよい講義かもしれない。

○環境問題の責任は誰にあるのか

環境問題では、責任の所在があいまいになる。先進国の責任は？

同罪と共同債務（フランクル 戦争責任の議論）

同罪と共同債務を区別しなければなりません。たとえ話で説明すると、すぐにおわかりいただけると思います。私が突然盲腸炎になったと考えてみてください。私にその罪があるのでしょうか。たしかにありません。けれども、手術しなければならないとなると、私は、手術する医師に手術の謝礼を払う責務があります。つまり、私は、医者
の勘定を払う責務があるのです。つまり、「罪のない責務」も十分にありうるのです。

「それでも人生にイエスと言う」 V.E.フランクル 1993 春秋社

② 科学が発達して、倫理観が変わったと思うか。

○倫理主体の多層化

個人だけでなく組織の倫理が問題となる

水俣病訴訟 政府の責任

個人の利害、正義感、意志と組織のそれとの不一致

労働組合、企業内倫理委員会の設置、第三者評価・・・

ヨハネスブルグ・サミット 政府+NGO+企業

○倫理的対象の多層化

人に対してだけでなく、物に対する倫理

新たな倫理の構築 「エコエティカ」(今道)

自然は無制限に人間の行為を許容しない

科学の導入による人間関係の間接化、遠隔化。隣人概念の転換

目的と手段の関係の逆転 手段が先行している

人間の扱う量、スピードの激的な増大

機械的社会の中で、判断放棄が起こっているのではないか 赤信号でなぜ止まるのか

倫理は社会的統制への他律的服従か

③ どのような価値観でも他人の価値観は尊重すべきか。

○価値の多様性を認めながら、共有できる倫理を構築できるか

「価値」というのは、本来比較不能なものを一次元化して比較しているのではないか

④ 自己中心主義、人間中心主義、生態系中心主義 (環境倫理の基盤)

キャロリン・マーチャント 「ラディカル・エコロジー」より

(a)自己中心的 自由放任の資本主義の倫理

個人の自己利益の最大化:各個人にとっての利益が全体としての社会の利益となる

相互に同意された相互的強制

機械論的世界観

(b)人間中心的 社会正義が目標 環境運動の主流→持続可能な開発

最大多数の人々のための最大善、社会正義、他の人間に対する義務

ソーシャル・エコロジスト、左翼グリーンズ、ソーシャル・エコフェミニスト

第二、第三世界の環境主義者

(c)生態系中心的 エコシステム全体を重視

エコロジーの法則に基づく合理的、科学的な信念の体系。エコシステムの統一性、安定性、多様性、調和。自然のバランスないしはカオスのシステムアプローチ。

自然そのものの価値を評価する。土地倫理、動物の権利、ディープ・エコロジー

⑤ 非論理的要素

・論理性と非論理性のバランス

片方だけでは、問題は解決しない。

感情的要素の重要性

・論理だけでは導けないものがあること

「自然は美しいから守る」というのは論理的には誤謬

「である」から「すべき」は導けない 自然主義的誤謬

「直感によって判断する習慣のついている人々は、推理に関することがらについては何もわからない。なぜなら彼らはまず一目で見ぬこうとし、原理を求める習慣がついていないからである。これに反して、原理によって推理する習慣のついている他の人々は、直感に関することがらについては何もわからない。彼らはそこに原理を求めようとするが、一目で見ることなどできないからである。」 パスカル 「パンセ」

⑥ 非対称性倫理

- ・環境問題に現れる非対称な関係
 - 人間／自然、組織／個人、先進国／開発途上国、現在／未来
- ・強者／弱者の関係
 - 弱者の連帯
 - 強者に対する力の行使の制限
 - 強者の側の責任
- ・時間的非対称性
 - 環境問題は不可逆過程
 - 目標へ向けてのプロセスの重要性

3. 希望について

① 環境問題を解決しようとする様々な運動がある

NGOの活躍、緑の党による政治参加

企業努力 ISO14000、ナチュラル・ステップ、ゼロエミッションへの努力

公正な貿易 フェアー・トレード

環境に配慮した観光 エコツーリズム（観光立国をめざすコスタリカ）

環境都市づくり 環境首都（フライブルグ [ドイツ]、クリチバ [ブラジル]）

② 希望は、未来にかかわる

希望を持ち続けること（キルケゴール 死に至る病は絶望）

将来世代に対する配慮

自然に対する感動を失わないこと（夕日に対する感動 フランクル「夜と霧」）

内面生活の重要性

一つの未来を、彼自身の未来を信ずることができなかつた人間は収容所で滅亡して行った。

「何故生きるかを知っている者は、殆どあらゆる如何に生きるか、に耐えるのだ」 ニーチェ。囚人が現在の生活の恐ろしい「如何に」（状態）に、つまり収容所生活のすさまじさに、内的に抵抗に身を維持するためには何らかの機会がある限り囚人にその生きるための「何故」をすなわち生活目的を意識せしめねばならないのである。

「夜と霧」 ドイツ強制収容所の体験記録 フランクル みすず書房

この希望に関するところに、宗教がもっともよく関われるのではないか。

③ 本当の豊かさとは何か

誰が開発を望んでいるのか

富＝持ち物／欲望

環境への負荷をなくすのではなく（それは人間の本性にかかわっている）、より少なくする努力をすること。欲望を減らすこと。

場合によっては開発をやめる勇気（ダム建設の中止）。

合理性＝可変性

科学の基盤である合理性は、修正が可能であることと言い換えられるのではないか

4. 科学・技術者として

(1) 科学者の社会的責任

倫理教育の必要性、社会とのかかわり

(2)科学に対する社会からの批判 科学の負の側面の認識

反科学論 ファイアーアーベント、ヴィトゲンシュタイン

謙虚さ 科学は真理を探究する方法論のひとつ

(3)科学のあり方

科学の目的は何か。 コントロールから共生へ

還元論的手法は有力の手法であるが、問題の種類によっては限界もあることを認識すること。

複雑系の理解 環境に配慮した科学のあり方

全体論 holism なアプローチがどこまで有効かはまだ未知数

文化のみが方向性を決める（文化決定論）わけではないが、科学自体が完全に価値中立とは言えないのではないか。価値という多様な要素を一次元化して序列化するという事は、科学が助長してきたのではないか。価値付けること（定量化）によってコントロールへの道を開いてきた。

科学は真理を探究するひとつの方法論

真理の多面性（楢円の2焦点、内村）

(4)他分野との協力

科学の方向性は、科学自身で決定できない

他分野とのコミュニケーションの重要性

真理という絶対的なものを求めている点で宗教に似ている（Science 誌の記事）

(5)時間の認識

科学は歴史的制約を受けていることの認識

再現性に基づく科学は、時間の中で一度しか起こらなかったことに対しては無力。

文献

環境と倫理 加藤尚武編 1998 有斐閣

エコエティカー生圏倫理学入門 今道友信 講談社学術文庫

ラディカルエコロジー キャロリン・マーチャント 産業図書 1994

バイオパイラシー バンダナ・シバ 緑風出版 2002

自然保護という思想 沼田真 岩波新書

地球と存在の哲学 オギュスタン・ベルク ちくま新書

エコロジーと人権 村田恭雄 明石書店 1998

私的所有論 立岩真也 勁草書房 1997

弱くある自由へ—自己決定・介護・生死の技術 立岩真也 青土社 2000

生命を語る視座—先端医療が問いかけること 村上陽一郎 NTT出版 2002

環境の哲学—日本思想を現代に活かす 桑子敏雄 講談社学術文庫 1999

ディープ・エコロジー アラン・ドレングソン 昭和堂 2001

文明と自然—対立から統合へ 伊東俊太郎 刀水書房 2002

見える自然と見えない自然 田村正勝 行人社 2001

環境哲学の探究 尾関周二編 大月書店 1996

地球が生き残るための条件 ヴッパタール研究所編 家の光協会

科学者をめざす君たちへ 米国科学アカデミー編／池内了訳 化学同人
環境危機をあおってはいけない ビョルン・ロンボルグ 文芸春秋 2003
グローバル・フェミニズム ブライドッチ、チャルキエヴィッチ、ワイヤリング 青木書店 1999
自然保護を問いなおすー環境倫理とネットワーク 鬼頭秀一 ちくま新書 1996
思想としての地球 長崎浩 太田出版 2001
応用倫理学講義 2 環境 丸山徳次編 岩波書店 2004
グローバリゼーションの倫理学 ピーター・シンガー 昭和堂 2005
夜と霧 フランクル みすず書房 1961